

# 丹波篠山の黒大豆栽培 ～ムラが支える優良種子と家族農業～

## 日本農業遺産認定

丹波篠山の黒大豆栽培・300年の歴史

### 丹波篠山の灰小屋

化学肥料がなかった時代、農家は泥レンガや漆喰しっくいを使って小屋を作り、そこで枯れ枝や藁わら、草などを焼いて作った灰や焼き土を肥料にしました。焼き土は、土と藁や枯れ枝を交互に重ねて焼いたもので、黒大豆栽培にも使われたそうです。この小屋を「灰小屋」あるいは「灰屋」といい、古いものは江戸時代にまで遡るといいます。かつては日本全国にあったそうですが、今ではほとんど見られなくなりました。しかし、丹波篠山には240カ所以上もの灰小屋が残されています。半数は保存状態が良く、今はさまざまな用途で活用されており、農村景観を形作る貴重な建造物として評価されています。

「昔は枯れ枝を灰小屋で焼いて、灰を採って作物にやっていた」と、山裾やますその灰小屋の持ち主がかつての農業の様子を話してくれました。昭和の中頃まで耕運機などの農業機械はなく、農家は牛を飼い、牛を使って田畑を耕しました。現代のような肥料もなく、牛小屋にしいた藁を堆肥にして田畑に鋤きこみました。そして、山の枯れ枝を拾い集め、山裾の草を鎌で刈り、灰小屋で焼いて灰肥料を作りました。枯れ枝を背負って灰小屋に運ぶだけでも重労働だったそうですが、捨てるものや無駄になるものは一つもなかったといえます。

地球温暖化対策など、世界の国々が環境問題に取り組む中、日本でも環境に負担をかけない農業が求められるようになりました。灰小屋は、地域の資源を無駄なく使った時代の農業を思い起こさせてくれます。灰小屋を巡りながら、地域の環境のために私たちに何ができるのか、考えてみてはいかがでしょうか。



**山裾の灰屋(丸山)**

山の緑と相まって農村景観を引き立てる灰屋。泥レンガを積み重ねて作られています。今は農業資材の物置として使われています。



**2連式の灰屋(大野)**

灰肥料を保管する土屋つちや(左側)を備えた灰屋。2連式の灰屋は少なく、全体の14%程度です。3連式の灰屋も1カ所だけ見つかっています。

※灰小屋は、令和3年度の調査の結果、259棟が確認されています。